

【動物】犬、マルチーズ、去勢雄、10歳7ヶ月齢

【臨床症状】8歳齢時に口腔内出血を主訴に来院。血液検査にて血小板数が顕著に低値（検出限界以下）。免疫介在性血小板減少症を疑い、合成副腎皮質ホルモン剤と止血剤を服用。約2年後、血小板減少に加えて、進行性の貧血（ヘマトクリット値 22%）、クームス試験陽性。元気・食欲低下、発咳を示し全身状態が悪化。

【肉眼所見】死後2日目に全身解剖を実施。肺は全葉にわたり出血し、最大径1.5 cmの白色または暗赤色結節が多発。肺以外の全身諸臓器にも出血を疑う暗赤色病巣が多発していた。

【組織所見】紡錘形～多角形の腫瘍細胞の増殖によって構成される小腫瘤（< 3 mm 径；暗赤色結節部）が多発する。腫瘍細胞は肺実質内、出血巣内に充実性の小集塊をなし、まれにスリット状の小空隙を形成する。腫瘍細胞は好酸性細胞質並びに大小不同の核を有し、多核細胞、核分裂像、核濃縮を認める。腫瘍細胞の細胞質～細胞膜はCD31（PECAM-1）に陽性を示した。その他に出血、ヘモジデリン沈着、線維素析出、壊死（梗塞巣；白色結節部）、肺胞上皮細胞の腫大、線維化（肺胞壁、血管周囲、出血巣周囲、胸膜）も観察された。

【診断】血小板減少症の犬の肺にみられた血管肉腫並びに慢性重度の肺出血

【考察】本症例は臨床的には免疫介在性血小板減少症が疑われ、さらに免疫介在性貧血を併発しており、ヒトのエバンス症候群に類似した病態を示したと推測された。検索した限り肺以外の臓器に腫瘍細胞は認められず、転移性肺腫瘍の可能性は低いと考え、肺原発の血管肉腫を疑った。本症例の特徴は、肺に血管肉腫の腫瘍細胞が多発していたが、腫瘤形成は目立たず、遠隔転移巣も認められなかった点と考えた。近年の基礎研究によって、腫瘍進展に対する血小板の関与が明らかにされており、本症例においても血小板数の著明な減少が、血管肉腫の増殖に影響した可能性を疑った。（寸田祐嗣）

【参考文献】Haemmerle M *et al.* The platelet lifeline to cancer: challenges and opportunities. *Cancer Cell.* 2018 Jun 11; 33(6): 965–983.